

進化と生存という観点からの身体論的意味論

—いわゆる授受動詞についての考察つき—

竹内 義晴

0. 始めに

言語研究では言語が研究の対象なのであり、言語というのは意味をあらわすのだと考えられている。しかし、意味とは何かと考えると、分かったようでいて、よく分からないことが多い。意味について考えようとする、同語反復的な思考に陥ってしまい（「意味は意味だ！」）、先に進めなくなってしまう。同語反復のループにはまり込むのはお前の頭が悪いからだと言われればそれまでだが、ループから抜け出すには、どこかに抜け口を作らなければならない。ループからの抜け口は、何らかの現実との接点である。

言語というのは人間という動物に備わっている能力である。人間という動物は知性があるって文明を持ち、芸術を享受し、社会的な生活を営んでいて、なにか特別の動物であるかのように思われることが多いようだ。確かに、人間はさまざまな意味で、なにかの特別な動物なのだろう。それらの特殊性に注目して、それらの特殊な切り口から見た人間についての現実を、ループの抜け口とすることが、問題解決の一つの可能性である（「意味とは社会的関連性だ！」、「意味とは創造だ！」、などなど）。

確かに、人間というのはさまざまな方面に特殊化した顔を持つ、極度に多面的な存在である。この前提から出発するならば、人間が抱く『意味』というのもまた、さまざまなループの抜け口を同時的に共有する、放射状ネットワークのようなものとしてとらえるのが正しい。しかし人間がさまざまな意味で特殊な存在であるとしても、その基本は生物である。それぞれの生物がそれぞれにさまざまな特殊さを備えていて、その特殊さは計り知れない奥行きを持っていることを、多くの生物学者は明らかにしてきた。なにも人間ばかりを特殊扱いする必要はない。人間であっても、基本は生物なのであるという事実は否定しきれないものではない。

Ch.ダーウィンはすべての生物は、進化の歴史をたどっているのであって、人間だからといってその原則からはずれて存在しているのではないことを主張した。ドーキンスはさ

らに、生物は、遺伝子を次世代へ伝えるための生存メカニズムであると規定し、進化というのは遺伝子がこの生存メカニズムを使って生き延びる競争をしている結果なのでであると主張した。

私は、遺伝子が主役であるというR.ドーキンスの議論を理解したつもりであるが、この論文では、ドーキンス自身の著書におけるのと同様に、進化を個体や種の生存目的との関連で説明した箇所がかなりある。これは、自然言語が、人間が通常に関心を及ぼせる範囲を超えた性質のメカニズムをあるがままに記述・説明するためにはできていないことによる。そのような方向に言語を発展させていたならば、私たち人間はとっくの昔に滅んでしまっていたに違いないのである。

この論考では、私たちが生存メカニズムとしての生物である、ということを基底にすえ、この生物としての現実との接点を、手がかりに、意味の議論を見直してみたい。私には、生物としての私たちの存在との接点に、意味の議論のループからの抜け口を求めることは、他の抜け口を求めることに比べて、なにか特別な意味があるように思える。なんと言っても、生物であるということは、私たちに与えられる多くの特徴づけのほとんどについて、その基礎になっていることであり、そのことを否定しては、ものごとは始まらない。

「人間は偉い」といばってみたところで、そもそもは物にすぎない。そういう意味での、私たちの物理・化学的な物質としての存在はもちろん、生物としての存在の基底にある。しかし、それにもかかわらず、意味としてとらえられる事柄の相当の部分は、進化論的な意味での私たちの生物としての生存の問題、身体的なできあがりの問題に根ざしていると考えなくてはいけない。これが、この議論で私の主張したいことである。

以下の議論における、動物の行動についての記述は、クレブスとデイビスの行動生態学への入門書などによった。また、この論文には、以上の理論的な主張を踏まえた上での、いわゆる授受動詞についての具体的な考察が含まれている。

1. 生活と生存（物理・客観主義から進化論を踏まえた身体論へ）

私たちは物質的存在であるから、空間に位置を占めている。異なる物体は同時に同じ場所を占めることはできないから、私たちにとって他者は必ず、私とは異なる空間に位置している。私たちは他者と関係することなく生存を続けることはできない。例えば、他者である食物を摂取することなしに生存を続けることはできない。そして、他者と関係するた

めには、空間における他者の位置が分からなければならない。空間における位置を知ることができることは、私たちの生存にとって必要なことである。このようにして、空間の位置関係を分かる能力は私たちの生存に根ざし、おそらくは私たちが進化の過程で研ぎすましてきた意味の基礎づけの一つなのである。

本当にそうなのか。私たちは今日、複雑な電子技術の時代に生きていて、例えば移動中の車の中で、自分の向かっている場所と自分の現在位置との関係をかなり正確に地図の上で確認できる（GPSナビゲーションのおかげである）。しかし、宇宙の人工衛星から送られてくる電波を受け取って、それを手がかりに自分の位置を計算し、地図の上に表示する、という込み入った能力は、私たちの身体には明らかに備わっていない。これから何億年もの進化の過程を経て、私たちが獲得するはずの能力であるともとても思えない。

私たちには、日常の生活においてさまざまに使いこなしている能力があり、それらのかかりのものは、技術や文化によって支えられた特殊な能力である。位置関係を知るのにも、GPSほど複雑ではなくても、三角測量とか、羅針盤、測距儀、星を利用した航海術などの能力は訓練を経て獲得されるものであり、私たちが生物として生存のために直接受け継いできた能力そのものではない。（私は時間についての私たちの認知能力は、基本的には、生物としての空間認識に基づいているが、一部は文化における訓練に基づいているということを竹内（1995）で論じた。

私たちは二つの目を使うことによって距離を感じ取る生物である。私たちは重力の支配する、固い地面の上で生存のための闘いを勝ち抜いてきた生物であるが、そこで私たちが獲得した位置関係を理解する能力は、重力の軸と、その効く方向を基準に発達したものであった。そして私たちは、視覚によって得られた画像的な配置を、実際の行動における位置関係と対応づけ、計算する能力を磨き上げてきた生物である（地図を読み取る能力もおそらくはこの延長上にある）。

例えば、英語やドイツ語では、花瓶テーブルの上ののっていることを、前置詞の *on* や *auf* を使って表現する（花瓶がテーブルの上ののっている、というのはもう少し突き放してとらえると、花瓶が重力によってテーブルの上に押さえつけられているということなのである）。しかし、英語やドイツ語の前置詞のシステムには、この *on* や *auf* に意味的に直接に対立する表現が欠落している。*Under* や *unter* があるではないか、と思われるかもしれないが、これらの表現では例えば、天井にチューインガムのかたまりが、重力に逆らう力（粘着力）によって、へばりついていることを表現できないのである。

また、英語やドイツ語では、fall や fallen という動詞は、物体が重力以外の力に駆動されることなく空間を移動する（落ちる）ことを表現するが、これに意味的に直接に対立する独立した表現は欠落している。ヘリウムガスを充填した風船が重力に逆らう力（浮力）に駆動されてのぼっていくことを、go upwards とか、hinaufgehen のように、複合的に表現できても、直接にその運動に対応する表現は見つからない。日本語でも otiru という表現は、純粋に『落下』を表現する動詞であるが、純粋に『上昇』を表現するのは agaru でも noboru でもない。agaru は sagaru の対義語であって、otiru に直接に対立する表現ではない。noboru というのは、じつはこの段落において、説明のために私自身が使っているが、これは構造的な写像としてのメタフォリカルな用法である。

（厳密な意味で、on や auf、fall や fallen に直接対立する表現について議論しようとするのなら、ガムの粘着力とか、ヘリウム風船の浮力なんかではなく、地球に大接近した惑星による引力とか、『反重力?』のような、私たちに想定しにくいものを想定しなくてはいけないのだろう。そんな作業は、きっと、GPS ナヴィゲーションのことを理解しようとするのに似ているし、私たちが実際に宇宙空間で暮らすようなことになったら、私たちの生活のどこが基本的に変わってしまうのが、とても想像しにくいことと関係しているのに違いない。）

現実の生活や、そこで働く物質的、技術的要因に裏づけられて、私たちの認知の世界は限りなく複雑なものになっている。しかし、そうではあっても、私たちの認知の世界は、言語の仕組みに映し出されているように、基本的には、進化と生存に裏づけられてできあがっている身体を基本にしている。そのような基本の上にあって、現実の生活におけるさまざまな複雑さは、幾何学、機械、コンピュータ、相対性理論から素粒子論を含めて、アクロバティックな応用編なのだろう。

2. 進化と生存に根拠を持つ心の働きの諸領域

上に述べた私たちに備わっている心の働きの拡がりや、認知の世界の基本編における私たちの心の働きの在庫目録のようなものである。ここでの議論では、どの領域がもっとも原初的で重要なものであるのかということ、そんなに重要なことではない。一つの認知単位は、別のもっと基本的な認知単位から派生的に成立したと考えられることもある。しかし、そうではあっても、おそらくは、重要なことがいろいろ絡まりあって、基本的であってもすでに複雑なネットワークを構成しながら認知の世界は成立してきたのだろう。以

下の議論の順序は、便宜的なものであって、何らかの順序を示してはいるが、しかし絶対的な順序を示しているものなのではない。

2.1. 生殖、出産と子育て

私たちは、有性生殖によって子孫を残す方向に進化してきた。この方法に進化したことにより、私たちは生殖のパートナーを得ることなしに子孫を残すことはできなくなったのである。生殖のパートナーを求めることを宿命づけられた私たちにとって、私以外の存在に関心を向けることと、その存在にたどり着くこととは欠くことができないことである。私以外の存在に関心を向けることはまた、自己の発見の前提でもある。自己と他者の認知、そして位置や空間の認知が発生するためには、後述する、エネルギーの摂取（食）の必要性と共に、有性生殖への進化が大きな役割を果たしたのだろうと推測される。

有性生殖はまた、パートナーの奪い合いを宿命づける。確保していたパートナーを奪われないために争うこともあれば、奪い合いの結果パートナーを得ることもある。この場合にもまた、私たちは、争いの相手としての他者を認識し、そして戦う私としての自己の認識を求められる。闘争と所有は、進化と生存の視点からみて、非常に根源的な認知の領域の一つなのである。

コミュニケーションの能力を発達させた生物は、パートナーとの生殖行為を成功させる点においても、またパートナーをめぐる闘争において損失を抑える点においても、優位に立つことになった。コミュニケーションの形（型）を豊かにすることのできた生物には、より複雑な局面に対応して生存できる可能性が高まった。価値による秩序づけの体系の複雑さとともに、さまざまな局面に柔軟に対応するためのコミュニケーション形式の多様さは、文化の発達の重要な基盤である。

確保したパートナーを守るためにも、パートナーを奪うためにも、パートナーである、またはパートナーとしたい生殖対象への愛情や執着があったほうがよい。パートナーをめぐる争いに勝つためには、競争相手に対する嫌悪や憎しみがあつたほうがよい。生殖はまた、感情という根源的な認知領域のゆりかごの一つであつたのだろう。愛情や執着、嫌悪や憎しみという感情の発達は、さらに価値というものさしによる対象の評価・序列づけを育み、いわゆる文化の起源の一つになっているのに違いない。愛と憎しみはまた、生物の集団、社会形成の基礎となって、今日の個人から国家レベルにいたるまでのさまざまなドラマを引き起こしている。集団、社会形成もまた、文化の発達を支える要因の一つである。

生殖はもちろん、子孫という遺伝子の生存装置を再生する手段であり、遺伝子は子孫という器を使って、さらに生き延びるのである。遺伝子の戦略としては、子孫を守り育てることは最重要の課題であるといってよい。子孫を育てるという行動は、所有と感情という根源的な認知領域を発達させたもう一つの重要なゆりかごなのだと考えてよい。集団の発生を基礎づける要因としてもまた、子孫を育てるという行動は、家族的な意識の基礎として、重要である。進化と生存の観点から見れば、子孫を守り育てることは最重要な課題であり、生殖の役割を終えたパートナーの価値などは、子孫に食料を運び、守り育てる役割などを通じてかろうじて保たれるものであり、カマキリの例などでは、受精を成功させるために、メスに食べられてしまう。

2.2. エネルギー（源）の摂取としての食

生殖によって自分のコピーを残すことが、遺伝子の生存装置である生物の最大の目標であるとしても、その生存装置を維持するための日常は、エネルギー（源）の摂取によって保たれている。エネルギーが、体内に取り込まれ、消費されるためには、食べること、飲むこと、そして呼吸することが必要である。エネルギー（源）の摂取というのは長ったらしいから、ここでは、上記のことをひっくるめて食ということにする。

食はまず、物に頼らなければ生き延びられない私たちの存在を、私たちの肉体以上に特徴づけている。死生の問題は思弁的であり、直接に自分の肉体に思いを向けることは、ある程度の余裕ができた存在者にとって始めて可能なことである。貧困の環境で問題になるのは、物質としての食料の確保であって、エステティックサロンに通うことではない。

食は、生殖と同様に、自己や他者、そして空間の認知領域の根源であり、また所有や闘争、そして価値づけから文化に至る人間の認知領域の拠り所を基礎づけている。食物は発見し、たどり着き、口に入れなくてはならない。食物は守り、奪い取り、大切に保管しなければならない。

有毒な物と食べられる物の区別がなされなければならない。色や形の視覚情報処理能力と、味覚・嗅覚の情報処理能力の発達は重要である。有毒の食べられないものを低く評価し、効率のよい食べものを高く評価するような知覚と情報処理の仕組みを発達させた動物に、より生存のチャンスが大きかっただろう。そして、また、より高く評価された食物は、より激しい執着の対象になり、より激しい争いの原因になってきたに違いない。食物はまた、高次の知的情報処理能力を獲得した動物によっては、成長や健康状態との関係で評価されるだろう。試してみてひどい目にあった有害な食べ物を二度と口にしないことは、生

存にとって重要なことである。

以上にあげたような価値づけの背景が、現在の私たちの食文化が発達する上での基礎になっているのだろう。文化を基礎づける大きな要因は価値づけの体系なのである。

食はまた、食物の採取における協同を発達させた。植物の採取は、場合によっては被食者への攻撃である。食物の分布形態によっては、協同による植物の採取のほうが効率よく、協同という行動様式は、自己の生存に有利なのである。協同が行なわれる集団・社会の基本的単位は、すでに述べたように、子孫を育てるまとまりとしての家族である。協同という行動様式において成功するためにはまた、コミュニケーションの能力が必要になる。コミュニケーションの発達はまた、文化の成熟をさらにうながしたに違いない。被食の側でもまた、防衛の持つ意味は大きく、場合によっては、集団・社会による防衛、コミュニケーションによる防衛の効率化を可能にする遺伝子を持った個体は、よりたやすく生存することができたのだろう。

2.3. 居住

自分自身、そして確保している生殖の相手や、子孫、そして食物は、捕食者や競争相手に奪われる危険にさらされている。自分が熟知している居住地はよその土地よりもより安全である。回りを囲む山や森、崖や川によって保護された場所では、敵から見つけられることが少なく、開けた場所や小高い場所では、敵の接近についての情報を得やすい。そのような場所はそれぞれに、居住の地として優れている。

病虫害や疫病の発生しにくさ、食物の確保の容易さもまた、よい居住地の条件である。肥沃の地、適度な湿度が保たれる、風通しのよい場所は、よい居住地の条件を構成していると考えてよいだろう。よい居住地を快適な場所として好み、不良な居住地を嫌う能力もまた、生存の可能性を高める条件に違いない。周囲を壁などで囲まれた住居を得ることもまた、人間にとってだけではなく、多くの動物にとって安全と健康の維持に重要である。小鳥の親は、樹洞の巣穴の中に、逃避や防御活動ができないという意味で捕食者に対して無防備な雛を残して、餌を採取に出かけられる。雛はまた巣穴の中で、風雨に当たって凍死するという危険からも守られている。

よい居住の条件はまた、生存を条件づける集団・社会の形成・維持にとっても重要である。よりよい居住条件を得た動物は、その集団の規模についてより大きな自由を許されるとともに、集団内のコミュニケーションと社会形成において、ゆとりを許されるのである。

生存のために動物はよい居住環境を求める。この場合、移動をしなければならないという観点からも、環境を評価しなければならないという観点からも、空間についての高度の認知能力が獲得されることは重要である。また、このようなよい居住の条件は、争奪の対象であり、動物は居住をめぐってもまた、闘争の環境に巻き込まれることになる。動物は居住をめぐる諸環境を評価・価値づけし、その価値づけに基づいて争いあってきたのである。

価値づけの対象としての居住はまた、居住をめぐる文化を発達させた。それぞれの動物はさまざまに興味深い居住の形式とその形成・維持の技術を継承しているが、その有名な例はビーバーのダム作りや、蜘蛛の糸と植物の葉を巧みに使う小鳥のクイタダキやセッカの巣作りだろう。闘争における防衛と安全を確保することの必要が居住に関わる進化をうながしたのだともいえる。

2.4. 闘争と所有、平和と安定、幸運

生殖、食物、居住環境が、動物の基本的な所有と闘争の対象であっただろう。おそらくは、希少な資源をめぐる闘争が、守るべき所有対象への執着を生み出した。闘争の対象に対する執着がそもそもなければ、闘争もない。しかし、闘争の結果、獲得した対象については、より強く執着するということがみられる。群れを支配するニホンザルのボスは、自分が食べる必要以上の餌についても、下位の猿が勝手にそれを取ることを許さないという報告がある。この執着こそが所有の起源なのだろう。

効率面から考えてみてもまた、自分が闘争の結果得たものについて執着を示さずに、それを他の競争者が取ろうとするのをそのままにしておいて、他の対象を獲得する闘争に関わることには無駄が多すぎる。そのような無駄の多い行動を選ばせる遺伝子は競争を生き延びられない。

闘争と所有とに由来する執着は、以上のように二重の意味で、価値づけの起源の重要な源の一つである。所有に基礎づけられた執着から行なわれる価値づけは、単なる対象についての、生存によい／悪いという、直接的な価値づけとは違った意味を持っている。この、対象についての、直接的ではない執着から生まれる価値観こそが、「所有」といわれる、動物社会にありとあらゆる形でみられる現象を複雑で分かりにくくしているのだろう。動物は所有のために所有しようとするのである。

食と別の意味で、所有の関係は、対象の物質としての存在に独立の認知的位置づけをあたえるのに貢献したに違いない。実体のないものにこだわれるほど、私たち動物の情報処理能力には余裕がない。所有という意識は自分の領域（なわばり）との関係で成り立っている意識のようであり、自分の縄張りの外での所有の侵害は黙認される傾向がある。自分の所有対象を自分の近くに置かなければ、そもそもそれが奪われようとしているのかということも分からない。所有対象を自分の近くに置くことは、所有対象を自分にとって実体感のあるものとして、自分の支配下に置き、それを守ることと密接に関連している。所有は、自己の縄張りという空間意識の形成と関連しているのである。

動物間のきびしい闘争環境はまた、闘争に関わる能力と、さらにその評価能力を進化させた。より優れた闘争能力（力・速さ・技）を身につけた個体はより優位に立てるのだし、自己と他者の能力の差を正しく評価できる個体は、戦うべきか否かの正しい選択をすることによって、より優位に立てるのである。闘争は損害をこうむる可能性を前提とした賭けであり、その意味では、平和と安定の確保は、動物にとって重要な関心事であらざるを得ない。闘争が賭けである以上、平和と安定の確保が偶然性に支配されているという側面はかなり大きな意味を持っている。もちろん、平和と安定は、闘争によってだけ確保されるのではなく、むしろ、後でふれる協同によって確保されるものであり、協同においては賭けの性質は多少薄まっているともいえる。しかし、いずれにしても、私たちの生存は、幸運の積み重ねにゆだねられて、かろうじて継続してきた。

2.5. 物質存在・空間・時間・対象の自己同一性、変化・移動

私たちの世界は、とりあえず物質によってできている。物質は空間を埋め、空間は時間を通じた連続体であり、物質は時間を通じて空間での対象としての同一性を保ち、物質が時間の経緯と共に異なる性質を得るならば、それは変化であり、異なる位置を得るならば、それは移動である。このような常識は、私たちが文明化された社会の構成員として、教育を受けた結果手に入れたものであるとしても、その起源は、すでに論じてきたように、進化と生存に条件づけられた身体に基づくものであるに違いない。

物質の実在性は食を巡る現実と所有の関係から生まれた認識である。他方、空間は、自己が生殖と食、居住環境を求めて行動する関係から生まれたと考えられる。

空間を移動する生活をする存在としての私たち動物にとって、時間は最初から与えられたものであるに違いない。化学変化の複合体としての自然現象の主体（生物体）であり、同時に享受者である動物にとってはまた、変化というのは生命そのものであって、そこには

時間はあらかじめ与えられたものなのである。多くの言語では、時間は空間表現を使ったメタファーとして表現される（例えば「長い時間が過ぎて行った」）。しかし、このことは、時間の認識が空間の認識よりも後になってできたということではない。空間は視覚の直接的な対象としてとらえられるが、時間は、視覚によって捕らえられる「移動」や「変化」、「始まり」や「結果」という直接的な知覚においてすでに与えられている。ただ、時間は、移動や変化という直接的な知覚の相関者として、間接的にしか感じ取ることができないという点で、不思議な対象なのである。

キス釣りをしながら初夏のゆったりとした日没を見て受けとめている時間は、栗拾いで山道を歩きながら秋の釣瓶落としの日没を見て受けとめている時間とは異なっている。遅々として論文を書き進める私が、原稿というテキストの変化を経験しながら受けとめている時間は、楽しく余暇を過ごす私の受けとめている時間とも、無情な電子時計の知らせる時間とも異なっている。しかし、それにもかかわらず、私たちが日常の生活から受けとめている時間は、電子時計の知らせる常識的な時間とそれほど極端にずれてしまうのではない。

私たちが時空における存在者が一貫して同一の存在者であること（自己同一性）を当たり前のこととしているのは、そのようにして物理世界ができていることを知っているからではない。私たちは、むしろ、時空を生きる当事者なのであって、当事者の自己同一性が途切れるわけには行かない。また、当事者としての自分は、生殖や闘争の相手との関わりとしての生活に巻き込まれているのであるから、自分だけではなく、他者の自己同一性も保たなければ、生活の意味連関は失われてしまう。進化の過程で、生活の意味連関を失ってしまうようなことはありえず、存在者の自己同一性を当たり前とする認知能力の維持は、進化的に当然のことなのである。

私たちは空間を物質が占めていて、空間と時間の中に、存在者の自己同一性を介した移動や変化の整合性が保たれているという認識を持つようにできている。このような認識を持つようにできあがったことはしかし、歴史の偶然であり、その認識像が物理学的に追求されて解明されることと、非常に似ているとしても、直接の因果関係はない。しかし、それならば、私たちの認識は偶然であるにしても、物理学的に探求される世界の構造と、どうしてこれほどまでに似ているのだろうか。これは、言うまでもなく、私たちは、そのような物理的な成り立ちの世界において進化をとげたからであり、物理的な成り立ちの世界を生き延びるのに適した認知像を獲得した個体だけが、淘汰というプロセスを経て生き残ってきたのに違いないからなのである。

2.6. 知覚と情報処理（五感による入力と認識）

生殖、食そして居住、さらに、それをめぐる闘争と所有を最重要課題とする進化と生存のメカニズムにとって、何にも増して情報を集め、処理する能力における差別化は、重要な意味合いを持っている。五感（視・聴・味・嗅・触覚を含めた体制感覚）による直接の外部情報の収集と処理は、空間情報に限らず、生殖や食の対象についての形式による識別と序列化において重要である。

動物は生殖や食、更に居住環境について、対象の存在に注意を向け、対象が持つ性質を知覚・情報処理し、その形式にしたがった序列化をおこない、良質な対象を心地よく感受し、不良な対象を不快なものとして排除する能力を獲得してきた。私たちが体格のよい配偶者を求め、おいしいものを欲しがり、じめじめした土地を嫌うのは、たいていはそのような進化と生存のメカニズムに操られているからにすぎない。

私たちが好みに従って行動するという、対象の評価づけと序列化の能力は、文化的な行動パターンといわれるほどの構造をとるまでに複雑化している。私の世代の男性（1950年代生まれ）の多くの女性の外見についての評価は、ミニスカートをはいた痩せ型の女性へ、長いスカートで足を覆った長身の女性へ、ふくよかでよく日焼けしたタイプの女性へと、時代の流行にしたがって、まとまった揺れを示してきた。私たちの、文化と呼ばれる気まぐれもまた、どこかで私たちの進化と生存に関係していることなのかもしれない。

五感によって集められた情報を使って、生存により適した行動を進化させるためには、情報識別能力の精密化と情報処理の能力の発達が必要である。情報を集める能力の鋭さ、精密さと、情報を蓄え、整理する能力をバランスよく発達させることのできない動物は、より複雑な情報に対処することができずに、滅びていってしまうに違いない。例えば、私たちの視覚は、進化の段階でカメラのような仕組みの眼球を二つ使った、連続的な立体視を獲得した時点で、神経回路網の働きとして、すでに非常に高度な情報処理の能力を実現している。

このような高次の情報処理能力の発達は、私たち人間の場合、自己を意識することのできるような、高度な精神活動を持つまでに至っている。精神活動の発達については、次の項目で議論するように、外界とのインタラクションと社会形成が大きな役割を果たしたのに違いない。

2.7. 外界とのインタラクションと協同・社会形成、心の発達、理解

動物の行動は、遺伝子の生き延びのためのメカニズムとしての進化、という自然の原理に従っているために、基本的に目標追求的である。行動面においても、自己が生き延びることについて最良の出現形を生じさせる遺伝子が生き延びるというメカニズムが働いた結果、「目標追求的」とあるという解釈がもっともふさわしい行動をとる生物ばかりが存在することになった。

私たちの行動は、自分以外の存在者としての外界への働きかけから成り立っている。私たちは外界を認知し、評価し、外界との適切なインタラクションの機会を選択しようとする。私たちのインタラクションの対象としての外界は「物の世界」と「者の世界」とに分けられる。

「物の世界」への働きかけにおいては、単純に環境からの恩恵を享受する形で、採取や居住活動を行なうだけではなく、変化を与えること（土木・建築、加工、栽培、生産）によって、より積極的に環境を利用することを発達させた個体が生存において優位に立てたのに違いない。

環境からより多くの利益を得るためには、個体は、外界を単なる対象としてではなく、事態の生起としてとらえることが必要である。例えば、採取や栽培の対象となる植物のライフサイクルが誕生から成長、成熟から次世代への交代としての死までが、できごと、あるいは物語として把握できなければ、食の行動において生存の可能性を最良のものにしようとする動物の環境に対する働きかけは、気まぐれの域を出られなかつただろう。そして、それができなかった動物は長い歴史の淘汰圧を生き延びられなかつたはずである。

環境は、よりよい生存の機会を求める主体としての個体が競合する世界であるから、「物の世界」としての外界への働きかけは、同時に「者の世界」、主体としての他者への働きかけを伴わなければ、有効でありえない。他者への働きかけは、協力者としてのものであったり、競合者としてのものであったりする。

他者への働きかけは、他者が主体であり、他者にも自分と同じように主体としての心の存在があるという認識があつて、始めて可能である。働きかけの対象に主体としての心の存在が認められなければ、それは主体としての「者」への働きかけではなく、物質としての「物」への働きかけに過ぎない。

主体としての他者への働きかけは、他者の心の読みと評価、他者への心の開示と隠蔽、信頼の形成、裏切り、などから成り立っている。動物の共同行動の多くの部分は、明示的な情報交換によるのではなく、相互の行動の読みから成り立っている。鳥や魚の群れとしての整然とした方向転換においても、人間の世界での、混雑した交差点での人の往来にしても、個体同士がぶつかりあうことなどほとんど見ることがない。それぞれの参加者が、すべての参加者について、均質の心の働きがあることを信頼していて、周囲の参加者の行動を読み、読みに応じた適切な移動を行っている結果が、あの整然とした行動の「見え」として出現するのである。

相互の行動の読みを前提として成り立つ共同行動においては、動物行動学者が指摘するように、騙しが重要な役割を演ずるようになる。騙す行動を発達させた個体は、疑うことを知らない正直者が占める集団においては、優位に立つことができる。信頼をベースにする集団においては、騙す行動を発達させた個体が必ず出現するから、そのような集団で生き延びるためには疑う心もまた必ず発達する。しかし、疑うことばかりしては効率が悪いから、疑う能力がそれほど極端に発達するということはなかったのだろう。

相互の心の読み合いを基本とする集団では、心は均質化し、行動様式も統一化され、約束事が生まれるだろう。均質化の進んだ心は相互に読み取りの効率が高く、生存の可能性を高くする。統一化の進んだ行動様式は、先を読むのがたやすく、集団行動が潤滑に行われるのを容易にする。行動の先読みは、約束事へと発達するだろう。

牙をむき出した個体については、次の瞬間に攻撃に移ることが予測できる。急所である喉もとを無防備にさらけ出した個体については、次の瞬間に攻撃することはないだろうと予測できる。例えば、オオカミなどの群れの中での争いにおいては、自分の急所を相手にさらすことは、一連の約束事が開始される合図となっているという。この合図を出された相手は、多くの場合、儀式的に相手の急所を噛むしぐさをすることで、争いを止める。勝ち負けは決定し、群れの中での上下の関係が決まるようになっているというのである。

また、メスに納得の得られる大きさの虫をプレゼントするという犠牲を払うことで儀礼をはたしたガガンボモドキのオスだけがメスと交尾できるのだという。動物の行動においては、このような「求愛給餌」と呼ばれる利益の提供とそれに対する報酬という約束事が成立している例が多く見られるようである。

外界とのインタラクション、特に相互の心の読み合いは、外界や他者を評価し、理解するという心の働きを生み出し、事態の進展や相手の行動に対する期待や希望、そして失望という心の働きを生み出した。また、「外界としての他者」への相互的な働きかけの積み重ねとしての歴史を通じた淘汰によって、動物は相互に依存し合い、協同する社会的な存在に進化した。そのような社会の生活においては、コミュニケーションが重要な意味を持つようになる。

2.8. コミュニケーション能力の発達

ミツバチはダンスで餌のありかを伝え、オオカミは協調して獲物を狩ることが知られている。コミュニケーション能力が発達する場合の基本の一つは、恐らくは、他者の見せる外見についての推論能力の発達だったであろう。例えば、他者の視線を正しく解析し、相手の注意点を探り出すことによって、互いに競い合わなくてはならない生殖のパートナーの位置、食物の位置、居住適合地の位置を知ることができる。餌のありか、協調して狩る獲物の位置、そして、敵対する闘争相手の攻撃意図(次の一手)についての情報は、例えば視線のような、対象への指向的な直線(注意)の認知によって得られるのである。

争奪の対象への注意の共有はさらに、争奪対象についての闘争上のかけ引きという原初的なコミュニケーションの発達につながっていく。生存のためには、無駄な争いは避けられなければいけない。注意を向け続けることが、威嚇と自己主張、獲物を譲ることの拒否の表現に固定化し、注意をそらすことが、服従と獲物を譲ることの同意の表現に固定化したのだろう。他方、協調的な環境においては、視線の共有や相互の見つめ合いは、同意と協調関係の継続、視線をそらすことは、非同意と協調関係の中止への意志の表現に発展していくのだろうと考えられる。

私たち動物は、生殖対象や食物、居住環境への関心(評価と執着)の共有を基盤に、互いの認知世界が相互に共有されていること(公共性)への確信を強めていったのだろう。私たちが異邦人とのコミュニケーションにおいて、何らかの積極性を損なわせる不安を感じる場合、私たちは、単純に言語記号によって指示対象を提示することについて成功できるかどうかについてではなく、相互の認知世界が共有されているかどうかの不確実性に不安を感じることが多い。そして、このような不安を解消するためには、他者の言語を記号処理的に自分の言語に翻訳する技術ではなく、視線を代表例とした、身体的なコミュニケーション基盤についての体験が重要な意味を持つようになったのに違いない。

コミュニケーション能力をより高度に発達させることのできた個体には、より有利な生

存の条件が与えられる。さまざまな動物の種は、視線、表情、身振り、音声、文字などによる、さまざまなコミュニケーションの手段を高度に発展させた。例えば、人間は、視線、表情、身振り以外に、音声、文字による言語システムを獲得してきたのである。これらのコミュニケーション能力では、「対象への注意と、注意の向けられた対象の持つ情報の知覚」という動物の認知の基本構造に対応して、主部 - 述部という情報構造を持った記号化の仕組みが共通の基礎となっている。

2.9. 身体・運動・生理・生命・健康・美

進化は、動物を単純な単細胞の存在から私たちのような複雑な身体を持つ存在に進化させた。私たちは、すでに述べたように、精神を持つまでに至ったが、しかし、それでもなお身体が存在のもっとも重要な基盤である。

私たちは、生き延びるためにいろいろなことをするが、その多くの行動においては何と云っても、身体を動かすことが基本になっている。すでに、私たちの知覚情報処理能力が非常に精巧なものであることは述べたが、私たちの運動能力についても、例えば歩行ロボットをコンピュータ制御で実現させるのが大変複雑な試みであることを考えてみても、これは、神経の働きによって非常に精巧に制御された、優れたものであることが分かる。

このような精巧な知覚情報処理能力と運動能力を制御する神経系の働きは、すでに非常に高度な段階に達しているものといえる。言語を獲得し、自己を認識する、人間レベルでの精神活動には及ばないのかもしれないが、動物のレベルにおいて私たちはすでに相当高度な神経系の働きを獲得していたのである。これらの神経系の働きにおいて重要なものの一つは、身体の活動、運動についての認識であり、私たちは、無意識の内にはあるが、自分の運動の現状を認識しながら、さらに運動の制御を行っている。

私たちの神経系は、運動についてだけではなく、私たちの身体の状態そのものについても、情報を集めている。特に運動をする場合には、体調に応じて、疲れ具合に応じて、運動の仕方を制御していることが自覚できるが、私たちの体は、運動していなくてもしっかりと神経系の監視を受けていて、水分が不足すれば喉が渇き、水を飲むことをうながすし、体を温めることが必要になれば、寒気がして、フトンをかぶりたくなる。

身体を持つ私たちにとって、生命の誕生、成長、そして死は非常に身近な問題である。そもそも、私たち生物は、誕生から死までの「生命」を連鎖としてつなぐことによって、遺伝子の生き延びの道具となっているのであった。そのような存在の私たちは、誕生と成

長にかかわることが喜びによって報いられ、とくに生命の連鎖を中断させる死にかかわることが、悲しみによって罰せられるように進化してきたのだといえる。おなじ理由で、健康と病気・障害もまた、私たちにとっての重要な関心事であらざるをえないのだといえる。健康な身体を持つ個体は、より有望な配偶者候補として、投資のしがいのある子孫として、高く評価されることになる。

2.10. 価値づけと感情、文化、心の働きのネットワーク

これまで議論した、進化と生存に根拠を持つ心の働きの諸領域は、互いに関連し合い、ある領域は別の領域を介して、さらに別の領域と関連している。例えばこの項目の表題である「価値づけと感情、文化」の領域は、生殖の領域とも、闘争と所有の領域とも、居住の領域とも、外界とのインタラクションの領域とも、また身体の領域とも関連している。私たちはほとんどすべての心の働きにおいて、価値づけし、価値づけを根拠に執着や嫌悪という感情を抱き、この感情によってさまざまな生存への行動に駆りたてられているようなものでもある。

均質化された心の共有によって、私たちは社会的な動物に進化したという議論をしたが、私たちの対象への価値づけは、均質化された心の働きにおいてはパターン化され、文化という形を整えるようになってきたのだろう。文化をもつ動物の心は、さまざまな領域についての心の働きを結んだ、再起的な入れ子構造を伴う、複雑なネットワークの働きの現れである。このネットワークは、さまざまな単位の働きにおいて、それぞれに、ある傾向の偏りを持ってダイナミックに変化する感情と価値づけのパターンによって特徴づけられるだろう。このような価値づけの偏りを持ったネットワークのパターンが働くその時々の瞬間、そしてその連続体が、私たちには心の働きとして認識されることになるのである。

3. 言語事実としての心の働き—いわゆる授受関係を表現する動詞の意味を例に

以上、非常におおざっぱに、進化と生存に根拠を持つさまざまな心の働きの成り立ちを概観した。以下では、これらの、そもそもは「動物的な存在から進化した」人間にとっての、基本的な心の働きの諸領域が、文明を持ち、高度の科学技術を誇る今日の私たちが使っている言語の意味においても、やはり重要な位置を保っているのだ、ということ、いわゆる授受関係を表現する動詞の意味を例に取り上げながら、簡単に議論したい。

3.1. 授け

英語、ドイツ語、日本語を通じて、give、geben、yaru については、ずれが少ないこと

が見て取れる。たったこれだけの言語の例を並べただけで、「授ける」者から「貰う／受け取る」者への方向の授受の方が、その逆の授受よりも意味が安定しているというのは、議論を急ぎすぎではある。しかし、そうではあっても、筆者の知る三つの言語においては、そうなのであるから、ある種の保留を置いた上で、「授ける」者から「貰う／受け取る」者への方向の授受とは、進化と生存の観点からみて、どのような性格のものなのかについて考察してみよう。

「授ける」者から「貰う／受け取る」者への方向の授受を記述・説明する場合に、どうしても避けて通れない要因が幾つかある。

3.1.1. 授けと所有・価値

すでに詳しく述べたように、所有という心の働きを持つことは動物の進化の過程で見過ごすことのできないことであった。授受ということが、言語を使いこなす人間の心に概念化されるためには、何にも増して、「授ける」者が、「授けの対象」について「所有」という心の働きを持っていることが欠かせない。(1)-(6)の例文から分かるように、私たちは、自分の所有下にあるものしか、「授け」の対象にすることができない。だれのものか分からないものや、明らかに自分のものではないものは、だれかに授けてはいけない。また、執着の対象ではありえない、という意味で所有の対象といえるほどの価値のないものは、「授け」の対象にならないのである。

- 1) kono hon, issyo-kenmei hataraitte katta-n-da kedo, omae ni yaru yo.
- 2) ?Kono hon, dare no ka wakaranai kedo, omae ni yaru yo.
- 3) ?kono hon, kudaranai kara, omae ni yaru yo.
- 4) I paid much for this book, but I give you this book
- 5) ?I don't know, whose book is this, but I give you this book.
- 6) ? I give you this book, because it is really boring.
- 7) Ich gebe dir das Buch, trotzdem ich schon viel bezahlt habe, um das zu kriegen.
- 8) ?Ich gebe dir das Buch, trotzdem ich eigentlich nicht genau weiss, wem das gehört.
- 9) ?Ich gebe dir das Buch, weil es wirklich langweilig ist.

授けを受ける側にもまた、所有という心の働きは重要である。授けを受ける者は、授けられる対象の新しい所有者になるのだが、所有という心の働きが持てるためには、授けられる対象は、新しい所有者にとっても執着の対象でありうるだけの価値のあるものでなく

てはならない。同じ理由で、授けようと思っている対象が、授けを受ける者から望まれているものでなければ、授けは成立しえない。

3.1.2. 授けと協同・報酬

授けが所有と関係しているという点で重要なことは、授けることによって、所有者は授ける対象の所有者ではなくなり、ある種の不利益を受けるということである。所有者が所有者でなくなる場合の可能性は大きく分けて授け、紛失、奪われの三つで、それぞれにおいて、この不利益をうける。この三つの可能性の中で授けはどこが違うのかというと、授けは意図的な行為であり、協同的な行為であるということである。それに対して、紛失は気がつかないうちに所有物がなくなってしまうのだし、奪われでは、暴力によって所有の解消が強制される。

授けによって、所有者は、自分の意志で、所有物を失うという不利益をこうむるということ、所有していた物の新しい所有者には誰がなって、所有者としての利益をこうむることになるのかということを決定する。さらに、新しい所有者や、その他の関与者には、授けることの行為者がすべてのそのような事情を承知した上で、所有者ではなくなるという不利益を受ける選択をしたことが知られることにならなければならない。このような相互の了解のもとに、授けるという行為は、協同という関係における、報酬の意味を持つことができるのである。

喧嘩や戦争というのは協同が成り立っていない事例の一つであるが、このような事例においても、争いの終結を目的として授与行為を行なうことがある。これは、授けるという行為が協同的な行為であるという私の主張への反例のように思われるかもしれない。しかし、争いにおいては、一方が争いを終結しようとして、授与行為を行なおうとしても、うまくいかない可能性がある。相手が争いを止めようとする意図を理解しようとする気がない場合である。このような場合の授与行為においても、最低限の協同がなりたっていないと、授与は成功しない。

3.1.3. 授けと移動

授けにおいて、授けの対象の所有者が交代するということは、授けの対象について、古い所有者から新しい所有者への移動が起きるということである。例えば、ボス猿が下位の猿に対して自分の持っている餌を食べるのを黙認する。これは「授け」の一つの周辺的な形態であり、言語表現としては、ここで議論している授与動詞のほかに、使役動詞も使われる。この場合にも、まず、授受の対象になる餌の、ボス猿の領域から下位の猿の領域へ

の移動が起きる。たとえ、物理的に、授与される餌の位置が変わらないとしても、それでも、当事者の主観のもとに相互了解されている、両者の所有の領域へ帰属関係が変わるという意味で、移動は起きるのである。餌を下位の猿が消費できるのは、この移動が完了した後のことである。

より典型的な授けは、所有者から新しい所有者への所有物の意図的な移動の実現（他動的移動）という形で実現する。日本語の授与動詞 *yaru* は、基本的には、このような移動の実現を意味するものであったのだろうし、英語の *hand* やドイツ語の *schenken*、日本語の *okuru*、*te-watasu* などの表現では、移動の実現という意味の方が授けの意味よりも強いように思われる。ただし、英語やドイツ語の他動的移動の動詞、*send* や *senden*、*schicken*、*liefern* によっては授けの意味は表わされない。

3.2. 授けの対概念としての所有の成立

英語、ドイツ語、日本語を通じて、*give*、*geben*、*yaru* という授けの表現は、およそ二通りの対概念を持っている。英語では、*give* と *get* の組み合わせと、*give* と *take* の組み合わせ。ドイツ語では *geben* と *bekommen* の組み合わせと、*geben* と *nehmen* の組み合わせ。そして、日本語では、*yaru* と *morau* の組み合わせと、*yaru* と *toru* の組み合わせ。以上のように、授けの表現一つに対して、それぞれ二つの対概念が組み合わせとして考えられる。これらの授けと対をなす概念では、主体が対象の新しい所有者になる。

英語では、*give* と *take* が典型的な対表現であるようにも思われるが、*Give as good as one gets* のような慣用句があり、*give* と *get* の組み合わせもしっかりと自己主張をしている。ドイツ語のネイティブスピーカーにテストしてみると、*geben* と対をなす表現として、*bekommen* をあげる場合と、*nehmen* をあげる場合とに判断が揺れることが分かる。日本語では、*yaru* に対して *morau* を思い浮かべることが多いと思うが、しかし、*yari-tori* という慣用表現が定着していることを考えると、*yaru* と *toru* の組み合わせも見逃すわけにはいかない。

一見すると、これらの組み合わせは、三つの言語においておよその相似関係にあるように思われる。しかし、検討を加えてみると、必ずしもそうではない。例えば、日本語の *yaru* と *toru* の組み合わせは、*yari-tori* という慣用表現においては、授けに関係しているというよりも、むしろ金銭や手紙、情報などの相互的な行き来（場所の移動）に関係している領域のことがらが表現されている。しかし、英語やドイツ語の *take* や *nehmen* ではそのようなことはない。

3.2.1. 日本語の *morau* は授けを前提としている

さらに重要なことがある。日本語では、*youtu* と *morau* が、授受関係という基本的な認知スキーマに対応している。しかし、英語 *give* と *get*、*give* と *take* の組み合わせや、ドイツ語の *geben* と *bekommen*、*geben* と *nehmen* の組み合わせでは、日本語に見られるような意味での授受関係の基本的な認知スキーマへの対応は見られない。この点について、以下で検討を加える。

それぞれの言語における対表現は、所有が変換する、場所が移動する、所有者は授与する対象に愛着を持っているが、所有の喪失という不利益をあえて引き受ける、新しい所有者にとって所有の成立がよろこばしいことである、という点が共通している。しかし、日本語の *morau* は *youtu* を前提とした、授与者からの恩義を負う表現である。授与者が、*morau* という動詞の主体が対象の新しい所有者になるように積極的に働きかけた結果、所有の移動が生起し、*morau* という動詞の主体が対象の新しい所有者になり、授与者に恩義を感じるという構造になっている。

ここでは、*morau* という動詞の主体が、*youtu* という動詞の主体の行為をありがたいと思うことが重要な意味を持っている。動物レベルでの認知としては、所有を放棄して他者に与えることと、そのことによって新しい所有者に生殖の優先権や服従の義務を求める授受の枠組みがあることを議論したが、そのような認知スキーマを、*morau* は背景に持っている。授与者になるはずの人が(10b)を発言したあとでは、新しい所有者になるはずの人は、(10a)の文を口にして、新しい所有者になるわけには行かないのはそういう事情によるのである。

10a) *kono hon, arigataku morai-masu yo.*

10b) *kono hon, omae niha yara-nai yo.*

関連した現象について言及しておこう。日本語では、買い物に *morau* を使うが、これはお金を払って、しかも、お客のくせに、売り手に感謝を表現しているという、おもしろい現象である。これもまた、お金を払うという、相手に負いや感謝の念を抱かせる行為をする側が、その行為を、自分が感謝し、負いを引き受けるという認知パターンを背景に持つ、*morau* という動詞によって表現することにより、人間関係のバランスを取ることから定着したのだと考えると、人間は言語を使いこなしながら、なかなかすごいことをやっている

といえる。

3.2.2. 英語の take やドイツ語の nehmen は授けを前提とせずに、所有の成立に積極的に関与する

しかし、英語の take やドイツ語の nehmen には日本語の morau におけるような授けを前提とする意味合いはない。自然の生活においては、生存に必要なものが自然界から供給されるとしても、それを獲得するためには、主体が力を行使して働きかけることが必要であることが多い。肉食動物は獲物を積極的に追いかけなければ食の対象を手に入れることができないし、草原の草を食べる動物も、一つの場所にとどまっていたら、資源を食べ尽くしてしまうので、新しい草原を求めて移動を続けなくてはならない。

動詞の主体が対象についての所有の成立に積極的に関与することがこれらの動詞では中心的な意味を持っている。take や nehmen では、授与者が、所有の変換に関与したかどうかは関係がなく、必ずしも授与者が所有の変換に関与する必要はない。例文に見られるように、ある対象について、授けがなくても、主体はその対象について take や nehmen することが可能なのである。

11a) Thank you, I take your offer.

11b) It doesn't matter, if you don't give me the money, I'll take it.

12a) Danke schön, ich nehme Ihr Angebot.

12b) Es nützt nicht, dass du mir das Geld nicht gibst. Ich werde einfach es nehmen.

英語の take やドイツ語の nehmen は、買い物の場面での使用に見られるように、合意を成立させながら、新しい所有を確立するという性格が強い。授けを前提とはせずに、しかも、合意に基づく所有の成立というのは、買い物の他には、賠償とか、相続とか、くじに当たるなどの可能性が考えられる。これらの合意の上での所有の確立を表現するのに使われる動詞は、英語では buy、recompense、inherit、win ドイツ語では kaufen、ersetzen、erben、gewinnen であるが、興味深いことに、英語や、ドイツ語では、左端から順に幸運による所有の成立という意味合いが濃くなるほどに、take や nehmen による置き換えがしにくくなる。

3.2.3. 英語の *get* やドイツ語の *bekommen* は授けを前提とせず、しかも所有の成立に積極的に関与しない

動物の生存と進化のプロセスにおいては、闘争と所有に由来する社会生活のかかわりにおいて成り立っている授受という所有の成立とは別の形においても、新しい所有の成立の可能性が重要な意味を持っていた。自然はすでに、例えば闘争の対象としての食物を、植物の成長、結実、被食動物の繁殖・成長などの結果として提供してきた。または居住適地は、地殻変動や気象の変化、それに伴う植生の変化、などによって提供されてきた。闘争や所有を語る以前に、自然は、動物の進化をはぐくむ土壌としてすでに、豊穡な基盤なのであった。

英語の *get* やドイツ語の *bekommen* では、自分が新しい所有者になることについて動詞の主体は決定的な役割を果たしてはいない。授かって所有者になるのは、一つの可能性であり、自分で集めても、くじで当たっても、なにかの外的なきっかけがあれば良い。授与者が、所有の変換に関与したかどうかは必ずしも関係がないのである。授けを前提とせずに、自然のプロセスの結果として所有対象が提供され、闘争などの妨げがなければ、そして、偶然としての幸運に恵まれれば、自然に新しい所有が成り立つという認知スキーマを背景にしているのだと考えられる。

以下の例文では、*get* や *bekommen* の主体である質問の受け手は、他者がきのこをくれたと答えるだけでなく、自分で集めたと答えることも可能なのである。

13a) Where have you got the mushrooms?

13b) He gave me them. He has gathered them in the forest.

13c) I have gathered them in the forest.

14a) Wo hast du die Pilze bekommen?

14b) Ich habe die Pilze von ihm geschenkt bekommen. Er hat sie im Wald gesammelt.

14c) Ich habe die Pilze im Wald gesammelt.

ドイツ語では、レストランでサービスする係が *Was bekommen Sie?* と注文を聞いて、客が *Ich nehme ...* と応じることもある。ここでは、客が主体的で積極的な注文を求められているのに、*bekommen* が使われていて、理屈に合わない気もする。しかし、これは、

主体の積極的な関与を表に出さない構造を持つ bekommen のメタフォリカルな用法なのであって、客に、せかさされた気分を押しつけずに注文をうながす、という効果を持つのである。

3.2.4. 日本語の授受基本パターンからのはみ出しとしての toru、eru

日本語の morau に対立する表現には yaru の他に toru という表現があることを指摘した。日本語の toru は確かに、英語の take と似た、動詞の主体が対象についての所有の成立に積極的に関与する表現である。しかし、日本語の toru は、yari-tori という対の慣用表現として考えてみた場合、すでに説明したように、授けに対立するというよりもむしろ、情報や金銭の相互的移動を意味する。

さらには、日本語では toru は強引に、暴力的に所有を変換させるという意味で使われることもある。日本語の toru は、karu と並んで、このような主体の積極的な貢献によって新しい所有が成立するという認知スキーマを背景にしているのだと考えられる。日本語の toru の守備範囲は、新しい所有の成立について、こっそりと、合意の形成なしに、または暴力的なかたちで関与することにまでおよぶことがある。Mono-tori とか okane wo tor-are-ta などという場合には、このような読みしかありえない。

英語の take や get、ドイツ語の nehmen や bekommen との関係で考えてみると、日本語には morau と対をなしているとはいえないが eru という表現がある。この表現は英語の get やドイツ語の bekommen と似ていて、動詞の主体が新しい所有者になるのであり、新しい所有者になったということについて、旧所有者も、自分自身も決定的な役割を果たすのではない。しかし、日本語では、eru は morau の対概念であるとは受けとめられない。日本語の eru は hirou のように、授けによる獲得を含まないわけではないが、hirou と同様に、偶然の取得を含みえる。

以上のように、日本語では、toru が英語の take やドイツ語の nehmen に似ていて、eru が英語の get やドイツ語の bekommen に似ているが、しかし何かが違うのである。その違いの根底にあるのは、すでに指摘したように、日本語の morau は授けを前提にした上で、yaru と対をなしているということ。そしてそのような意味で、英語やドイツ語には、日本語の morau に対応する表現がないということである。

分かりやすさのために表を書いてみると、ここでの議論については、英語、ドイツ語、日本語、の表現はおよそ以下のように対応しているようにみえる。これらの三つの言語に

おける、対応関係の分布の違いが、日本語の *toru* と *eru* を英語の *take* や *get*、ドイツ語の *nehmen* や *bekommen* と異なるものとして性格づけている。

日本語	<i>yaru</i>	(<i>toru</i>)	(<i>eru</i>)	<i>morau</i>
英語	<i>give</i>	<i>take</i>	<i>get</i>	φ
ドイツ語	<i>geben</i>	<i>nehmen</i>	<i>bekommen</i>	φ

授受の認知スキーマにはいろいろなパターンがあるのだろう。日本語では、それらの中の、授けがあって、その恩恵のもとに所有の成立がある、という可能性が *yaru* と *morau* の対立としての基本の枠組みになっている。*toru* と *eru* は、その基本から外れているので、授受と外れた盗みなどの読みが割り振られたり、*yaru* の対立表現としては見られなかったりすることがおこる。

逆に、授けがあってこそその所有の成立という、日本語の語彙にとっては基本的な授受の認知スキーマは、英語やドイツ語の語彙構造では、基本的なものであるというステータスをもたない。授けの *give* や *geben* に対して、積極的な取得の *take* や *nehmen*、必ずしも授けによらない取得の *get* や *nehmen* がそれぞれ独立している。もちろん、英語やドイツ語を話す人々の社会でも、授けがあってこそ、その恩恵のもとに所有の成立があるのだという認知構造は働かないわけではない。なぜなら、このような認知は、本論で論じてきたように、人間が動物の連続体として、進化の過程を経て獲得してきた、基本的な認知パターンであるからだ。

例えば、ドイツ語では、*dankend erhalten*(ありがたく頂戴しました) のような表現がある。また、お客さんからプレゼントを貰った場合に、こどもはそれぞれの言語で、だいたい以下の(a)のように親に報告するだろう。そして、親はこどもに(b)のように注意をうながすだろう。これらのやり取りのいずれにおいても、授けがあってこそその所有の成立という認知スキーマは生きているのだが、しかし、日本語においては報告の文中に *morau* が使われ、英語やドイツ語では *give* や *nehmen* が使われるのである。

15a) Mr. Jones gave me a present.

15b) Did you have said "Thank you"?

16a) Herr Jochen hat mir ein Geschenk gegeben.

16b) Hast du "Danke schön" gesagt?

17a) *yosio-ojisan kara omiyage wo moratta yo*

17b) "*arigatou*" *wa itta no.*

4. 結論

以上の考察を振り返ると、ある合意のもとに新しい所有が成立するということが、さまざまな認知のパターンを基底に、積極的かつ主体的なものから、偶然の運まかせのもの、授けに頼ったものまで、ある種のスケール上の分布をなして、言語的に表現されていることがみてとれる。しかし、この分布は、このスケールの上に絶対的、固定的に張りついているものではない。

例えば日本語では、*toru* の表現が、スケールの左端では合意のもとにという枠を超えて、詐欺や盗みによる所有の成立にまで及び、スケールの右側では、*saa,totte-kudasai* とご馳走をすすめるように相手による授けを前提とする *morau* の領域にまで及んでいる。他方、*morau* の表現は、スケールの右側での、相手による授けを前提とする領域だけではなく、すでに述べたように、買い物のような、主体の積極的な働きかけが意味を持つ領域までもカバーしている。これらの言語表現は相互に連続体として、重なり合う領域をカバーし合っているのである。

私は、このような込み入った言語の意味の分布を記述するために、私たちが動物として生存と進化の過程で獲得してきたさまざまな心の働きを考慮に入れることが有効であることを、この論文で主張した。私たちの言語を使いこなす能力は、つまるところは私たちの心の働きを反映したものなのであり、その心の働きは、つまるところ、私たちが動物としての長い進化の過程を経て、営々と蓄えてきたものの集積なのである。

言語研究は、認知言語学の登場によって、言語の形式性そのものだけではなく、言語を使いこなす人間の心の働きに目を向けながら、言語を営む人間を包括した、より深い言語の記述・説明に成功してきた。この認知言語学の展開の中で、レイコフやジョンソンは私たちの認知の仕組みが、基本的に私たちの身体に基づくものであるという主張をしてきた。私もまた、竹内（1999、2000a、2000b）などの一連の仕事で、「身体主義の言語学」を主張し、言語使用の背後にある人間の認知は身体に起源を持つことを主張してきた。

この論文で私は、さらに議論を一步先に進め、私たちの身体に基づく心の働き＝認知は、生物としての生存と進化の歴史に背景を持っているものであることを論じた。そのことを

考慮に入れることによって、言語の研究はさらに説得力をもち得るのだということを示そうとしたのである。心の科学としての認知科学は、その説明原理を心に求めるという堂々めくりのループを抜け出して、関連領域との接点を求めながら、人間存在のさらに興味深い側面を見せてくれるのではないだろうか。

文献表

- グリフィン、D.R.1984：動物は何を考えているか。どうぶつ社1989
- グリフィン、D.R.1992：動物の心。青土社1995
- クレブス、J.R.&デイビス、N.B. 1981：行動生物学を学ぶ人に。城田他訳、蒼樹書房1984
- 杉山幸丸 1984：サルを見て人間本性を探る。農山漁村文化協会
- ダーウイン、Ch. 1859：種の起源、岩波書店1984
- Darwin, Ch.1965: The Expression of the Emotion in Man and Animals. The University of Chicago Press.
- 竹内義晴 1995：時間についての自然言語表現の認知意味論。金沢大学文学部論集・文学科篇、第15号、159-173ページ
- 1999：言語表現の身体性について、認知構造、メタファー、オノマトペ。金沢大学文学部論集・文学科篇、第19号、87-117ページ
- 2000a：認知構造から発声形態へのメタファー的な写像、指示、否定、疑問の言語表現の身体性について。金沢大学文学部論集・文学科篇、第20号、105-127ページ
- 2000b：身体主義に基づく、主格の認知意味論。ドイツ文学104号、65-77ページ
- ドーキンス、R.1976：利己的な遺伝子。日高訳、紀伊国屋書店1991
- Lakoff, G. & Johnson, M 1999: Philosophy in the Flesh, The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought. New York: The Basic Books.